

平成21年6月12日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2007～2008  
 課題番号：19520659  
 研究課題名（和文） ベトナムにおける出土銭貨の基礎的研究

研究課題名（英文） Basic Research of Hoards in Vietnam

## 研究代表者

三宅 俊彦（MIYAKE TOSHIHIKO）

専修大学・文学部・兼任講師

研究者番号：90424324

研究成果の概要：ベトナムにおいて行われた、初めての本格的な一括出土銭の考古学的調査である。ハノイ周辺で発見された一括出土銭に含まれている銭貨の種類およびそれらの割合を明らかにした。その結果、中近世ベトナムの銭貨流通の様相が、具体的に明らかとなった。また、中国や日本の事例との比較を通して、これらベトナムの一括出土銭を東アジアの銭貨流通の中に位置づけることができた。さらに日本で鑄造された寛永通寶や長崎貿易銭も発見され、日越交流を銭貨から解明する手がかりを得た。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2008年度	1,700,000	510,000	2,210,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：考古学・銭貨流通・ベトナム・一括出土銭

## 1. 研究開始当初の背景

東アジアの貨幣は、中国で始まった銅の方孔円銭に大きな影響を受け、日本・ベトナム・朝鮮などで作られた銭貨もまた、方孔円銭の形状をした銅銭が主体であった。とりわけ日本の中世・近世にあたる時期の東アジアでは、非常に広範囲に流通していたことがわかっていく。

これら流通銭貨に関する考古学的研究は、

一括出土銭と呼ばれる大量に銭貨を埋めた遺構を研究対象として、近年、日本では盛んとなってきた。また研究代表者により、中国の事例に対しても検討が加えられ、日中の出土銭の比較が試みられている（三宅俊彦『中国の埋められた銭貨』同成社2005）。

また東南アジア地域、中でもベトナムは早くから中国文化の影響を受け、北部では前漢からすでに中国の銭貨がまとまって流入して

おり、10世紀末に独自の王朝を建てると自国の錢貨を鑄造し、同時に北宋錢などの中国錢貨も大量に流通するなど、東アジアにおける錢貨流通の中心のひとつであった。このことから、ベトナムにおける出土錢の考古学的調査は、必要不可欠であると考えた。

また、ベトナムのハノイおよびその周辺において、事前に予備調査を行ったところ、各時期の一括出土錢が、非常に良好な状態で多数存在することが明らかとなった。しかし、それらの出土錢が考古資料であるという認識は薄く、一部は骨董市へ流出している状況であった。このままでは貴重な考古資料である一括出土錢が失われる可能性があり、早急に調査を開始する必要を認めため、本調査の申請を行い、本格的な調査を開始することとなった。

## 2. 研究の目的

今回の研究では、ベトナムの一括出土錢の具体的様相を把握することが大きな目的であった。これまでのベトナムにおける錢貨研究は、ほぼ皆無と言ってよく、年報などに報告される出土錢の報告も非常に簡単なものであった。そのため、一括出土錢を考古学的手法によって調査・研究すること自体が初めての試みと言ってよい。

それら一括出土錢の調査を通じて、中近世のベトナムにおける錢貨流通の具体的な様相を、考古遺物から明らかにでき、貨幣史の研究に考古学からアプローチできると考えた。

またそれらは東アジアにおける錢貨流通の実体を復元する際にも、日本や中国といった他地域との比較・分析が可能となり、きわめて有用な資料となりうる。

ベトナムは、東アジアにおいて中国・日本と並んで錢貨流通が非常に盛んであった地域のひとつである。そしてそれぞれの地域は独立した貨幣経済を営んでいたのではなく、相互が有機的に連動しあって影響を与え合っていたのである。

そのため、ベトナム残る各時期の良好な一括出土錢を調査することで得られる成果は非常に大きいと考えた。

## 3. 研究の方法

### (1) 現地での調査

我々の行う研究は、まず一括出土錢を分析可能な考古資料として活用できるよう、基礎的な資料化を行うことが中心となる。以下に、その主な作業内容と手順を示す。

#### ① クリーニング

銹化の激しい錢貨を、ワイヤーブラシやルーターなどで洗浄し、錢貨銘が判読できるよ

うにする。

#### ② 錢種の同定

錢貨銘を判読し、錢種を同定する。

#### ③ 分類

錢種ごとに分類し、国・王朝・年代順に分類を行う。また、同じ錢貨銘であっても、字体や鑄造場所などによって細分類が可能な場合は、それも行う。

#### ④ 枚数の集計

それぞれの分類に従い、枚数を集計する。

#### ⑤ 拓本・写真

状態の良い錢貨を選び、拓本をとり資料化する。また、代表的なものを選び、写真撮影して記録する。

#### ⑥ 法量の計測

統計的処理の必要に応じて、各錢貨の直径・孔径・重量を計測する。直径と孔径は0.1mmまで、重量は0.1gまで計測し、集計表を作成する。

#### ⑦ 容器の実測・写真撮影

錢貨の容れられていた容器を図化する。併せて写真撮影も行う。

## (2) 国内での調査・研究・整理

### ① 調査結果の整理

ベトナムでの調査により集められた、拓本・写真・実測図などの資料を、利用可能な形で整理する。実測図に関してはデジタルトレースを行い、画像データ化する。

### ② 計測データの資料化

法量の計測表を、表計算ソフトに入力し、資料化する。

### ③ 関係資料の収集

調査により得られた結果から、関係する文献資料および研究論文を検索し、歴史的背景などを把握、考古資料を当時の錢貨流通の中に位置づける。

### ④ 報告書の作成

上記作業を経て、ほぼ調査が終了した一括出土錢(1~3号資料)に関して、調査研究報告書を作成。

昭和女子大学国際文化研究所研究紀要 Vol. 12『ベトナム北部の一括出土錢の調査研究』(2009年3月)として発行。

## 4. 研究成果

### (1) 14~16世紀の一括出土錢

今回の調査研究により、一括出土錢計6点のうち、1~3号資料の資料化が終了し、4号および6号資料の初歩的な分析を行うことができた。それぞれは含まれている錢貨の鑄造年から、おおよその埋められた時期が推測可能である。年代を区切って、順に見ていきたい。

#### ① 2号資料

容器：素焼きの筒状の甕で肩部に耳がつく。

陳朝（1225～1400）と推定。

数量：3,691枚。上部1/4がバラバラで、その下から67枚を一単位として、短い縷にまとめられた銭貨が10個検出された。さらにその下には、545枚を一連の縷紐に通した縷銭が、とぐろを巻くように入れられていた。さらにその下に短い縷銭が16個あり、最下部には短い縷銭を10個ひとまとめにした「一貫文縷」が検出された。

銭種：2号資料の総枚数は、51種類3,691枚である。最古銭は唐の開元通寶(621年初鑄)、最新銭は洪武通寶(1368年初鑄)であり、この銭種構成から14世紀末頃に埋められたものであると推測できる。すべて中国銭である。

#### ②4号資料

容器：焼き締め筒形容器である。体部上半に縄スダレ文を施す。

数量：3,518枚。容器の上部に短い縷が9個並べられ、下部はバラバラで縷はなかった。縷：9個の短い縷が検出された。67枚を一単位としていると推測される。

銭種：短い縷になっていた銭貨は現在整理の途中であり、銭種は不明である。バラバラになっていたものは3,003枚を数える。それらはほとんどが中国の銭貨であった。最古銭は前漢の五銖銭(b. c. 118年初鑄)で、最新銭は明の大中通寶(1361年初鑄)である。このことから、14世紀後半に埋められたものと推測される。

#### ③6号資料

容器：資料の発見時にすでに容器はなく、銭貨単体であった。しかし容器の形状に鑄び付いて固まっており、何らかの容器に容れられていたものであることは確実である。

数量：1,454枚。縷はなくバラバラであった。銭種：中国銭貨を主体としている。中でも北宋銭が多く、また唐の開元通寶も多い。このほかベトナムの銭貨も一定量混在しており、光順通寶(1460年初鑄)、洪徳通寶(1470年初鑄)、大和通寶(1443年初鑄)、景統通寶(1498年初鑄)など、みな15世紀後半の黎朝の銭貨であった。

最新銭の景統通寶から、埋められた時期は15世紀末から16世紀前半と推測される。

### (2) 16～18世紀の一括出土銭 (私鑄銭と模鑄銭)

#### ①3号資料

容器：上部が失われた素焼きの甕で、胴部には刻み目をもつ原体による文様を施す。

数量：残存していた銭貨は1,642枚であった。縷はなく、すべてバラバラに容れられていた。

銭種：この資料は官鑄の「制銭(精銭)」がなく、すべて私鑄銭と模鑄銭であった。それらは、作りが粗雑で直径が小さく、厚さも薄い。銭銘は半数以上が判読不明であり、銭銘が読み取れた729枚は、中国の銭貨を模した

ものが約90%(653枚)を占める。他はベトナムで作られたと考えられる私鑄銭である。

### (3) 19世紀初頭の一括出土銭

#### ①1号資料

容器：肩部の張った四耳壺である。18世紀代の製品で、ベトナム北部産と推測される。

数量：約3万枚。縷はなく、みなバラバラに容れられていた。銹化して分離不能の数百枚を除き、29,018枚を調査。

銭種：ベトナム：約87%。李・黎・西山・阮朝の銭貨が含まれ、黎朝が大部分を占めている(ベトナム銭の約98%)。中でも景興銭が多く、91.5%を占める。

中国：約11%。唐・五代・北宋・南宋・西夏・明・清の銭貨を確認。中でも多いのは清代の銭貨で約6%を占める。また、清初に雲南で反乱を起こした呉三桂らの銭貨も312枚含まれている。

日本：244枚発見。寛永通寶(7枚)、元豊通寶(236枚)、元通通寶(1枚)。寛永通寶は古寛永2枚、文銭1枚、新寛永7枚。元豊通寶は「長崎貿易銭」と呼ばれるものである。

### (4) 初歩的な考察

#### ①短陌慣行の確認

2号資料で注目される成果は、一貫文縷が発見されたことであろう。発見された一貫文縷は67枚を1単位として、2単位を並行に並べた後に縷紐を結び、また2単位を並行して並べる、という工程で作られており、2単位一組×5で、一貫文になっていた。これまでまったく不明であった、縷銭の構造を知ることのできる、貴重な発見である。



一貫文縷の構造模式図

日本では山梨県小和田館跡D地点の出土銭で、500文縷を2本両端で結び合わせる形で、輪のようにした一貫文縷が出土しており、両者の構造は異なっている。比較資料として、興味深い。

一貫文は本来、100枚1単位×10で、1,000枚でなくてはならない。100枚のはずの銭貨を、数を減らして1単位とすることを「短陌」と呼ぶ。中国では非常に多くの短陌慣行があり、宋代の公定短陌77陌の他、48陌から98陌まで各種短陌が民間で使用されていた(宮澤知之『宋代中国の国家と経済』創文社1998)。しかしその中には67陌はなく、ベトナム独自の短陌慣行であったことが分かる。

#### ②中国からの渡来銭の比較

14～16世紀の一括出土銭資料である2号・4号・6号の銭種組成は、中国の銭貨が主体であった。この時期は日本においても渡来銭が大量に流入し、貨幣経済の主役を担ってい

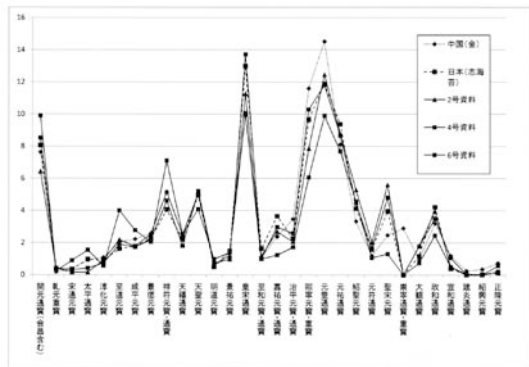
た。これらベトナム・日本における流通銭貨の銭種組成に違いがあるかどうか、組成を比較してみたい。

ベトナムの資料は、2号・4号・6号資料を使用する。これらの資料は14世紀末～16世紀のものとして想定されている。

この時期に並行する日本の一括出土銭として、北海道の志海苔から出土したものを使用する（市立函館博物館『函館志海苔古銭』1973）。中国では、残念ながらこの時期の一括出土銭には、良好な事例がない。時期的には若干遡るが、金の一括出土銭の事例を使用する（三宅俊彦『中国の埋められた銭貨』同成社2005）。

上記の資料の銭種のうち、上位30位までの銭貨を抽出して比較する。

比較した結果を下図に示す。この図を見ると、中国・ベトナム・日本とも、全体として非常に良く似た折れ線を描くことが分かる。つまり、中世の東アジアにおいて流通していた銭貨は、非常に均質であり、王朝や地域に関係なく同じような銭種組成であったことが明らかとなった。



一括出土銭の銭種組成の比較

### ③ 銭貨からみた日越交流

1号資料は日本の寛永通寶と長崎貿易銭が発見され、19世紀初頭のベトナムにおいて日本鑄造の銭貨が一定量流通していたことを確認した。これらの銭貨は、長崎貿易などを経てベトナムへもたらされたと考えられる。

長崎では、長崎貿易銭が1659～1685年に作られた。その銭銘は祥符元寶・天聖元寶・嘉祐通寶・熙寧元寶・元豐通寶・紹聖元寶の6種類の北宋銭を模したもので、今回その中の元豐通寶が237枚確認された。

これら長崎貿易銭は、東アジアで増大する銭貨需要に対応し、寛永通寶の海外流出を防ぐ目的で鑄造されたものであり、東野治之氏は近世日本において「銅銭が輸出される直接の引き金になったのは、安南での銅銭の需要だった」とし、ベトナムへの輸出銭貨として長崎貿易銭が作られたと指摘している（東野治之『貨幣の日本史』朝日出版社1997）。ベトナムの一括出土銭において発見されたことで、考古学的に長崎貿易銭の現地での流通

が確認された意義は大きい。



長崎貿易銭（元豐通寶）

また長崎貿易銭が輸入された17世紀から100年以上経過した、19世紀初頭の一括出土銭においてもなお、237枚もの長崎貿易銭が流通していた点も注目されよう。これは全体の0.82%にあたり、1%近くを占めていることになる。17世紀に輸入されてから散逸や改鑄されたことを勘案すれば、かなりの量の長崎貿易銭が輸入されたと考えられる。

また、わずか7枚であるが寛永通寶が出土した点も、ベトナムにおいて、寛永通寶が流通銭貨として認識されていたことを示す重要な発見である。寛永通寶は国内通貨として発行されたものであり、国外での流通は想定されていない銭貨である。しかし、東アジアの銭貨需要の高まりによって国外へと流出し、広く流通していたことが確認できた。

### ④ ベトナム北部の貨幣経済の復元

これらの一括出土銭は、制銭と私鑄銭・模鑄銭が明確に分けられて流通していたことを示唆している。このことから、北宋銭やベトナム銭の制銭を使用する経済と、低質の私鑄銭・模鑄銭を使用する経済が存在し、貨幣経済が二重構造をなしていたという可能性を考える必要がある。

黒田明伸によれば、16世紀末のジャワの貨幣経済の構造が、まさにこの二重構造を呈しており、「チエン」と呼ばれる銅銭が「基準銭」として資産保蔵用の銭貨であり、「カイシー」と呼ばれる低質の鉛銭は「通用銭」として日常的売買に用いられていたという（黒田明伸『貨幣システムの世界史』岩波書店2003）。

このような状況を、ベトナムの銭貨流通にあてはめるなら、「基準銭」は制銭を使ったもので、北宋銭主体の2号資料やベトナムの制銭が主体であった1号資料などがこれにあたり、「通用銭」はベトナムで私鑄・模鑄された低質の銭貨が主体の3号資料がこれに相当する。このように、ベトナムにおいても制銭と私鑄銭が、二重構造の貨幣経済によって使い分けられていたと考えられる。

まだ調査に取りかかっていない5号資料は、この3号資料と同様に私鑄銭のみで構成されていると思われ、私鑄銭による経済も一定規模で存在していたと推測される。今後事例の増加をまって、さらに検討を加えていきたい。

#### (5) 今後の展望

本研究は、ベトナムにおける一括出土銭に対する、ほぼ初めての本格的な考古調査である。ここまでの調査で、ベトナム北部の中近世の銭貨流通の実態が、明らかとなった意義は大きい。

今後、これらを中国・日本をはじめとするほかの地域の出土銭と比較することで、東アジアの銭貨流通の様相を考古学から復元できると期待される。

また、これまで調査が終了しているのは、1～3号資料のみである。今後も4～6号資料を継続して調査していく必要がある。また、ベトナム北部と中部・南部では、黎朝期を通じて異なる政体が支配しており、その経済もまったく異なっていたと推測される。そのためベトナム中部・南部でも、同様な一括出土銭の調査研究を行い、比較検討することが肝要である。

この様な出土銭を対象とした考古学的研究は、東アジアでは緒に就いたばかりであり、今後の研究の進展が大いに期待される分野であるとする。最終的には、「東アジアの貨幣考古学」の確立を目指したい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

三宅俊彦「東アジア銭貨流通におけるベトナム出土銭の位置づけ」『昭和女子大学国際文化研究所研究紀要』Vol.12、2009年、178～186

[学会発表] (計1件)

三宅俊彦・菊地誠一・櫻木晋一・大内俊二  
「ベトナム北部出土の一括出土銭の調査」  
日本考古学協会 (第74回)  
2008年5月25日  
東海大学

[その他] (計1件)

新聞掲載  
三宅俊彦「ベトナムの『一括出土銭』」  
『讀賣新聞』朝刊、2009年6月12日

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

三宅 俊彦 (MIYAKE TOSHIHIKO)  
専修大学・文学部・兼任講師  
研究者番号：90424324

##### (2) 研究協力者

菊地 誠一 (KIKUCHI SEIICHI)  
昭和女子大学・人間文化学部・教授  
研究者番号：40327953

櫻木 晋一 (SAKURAKI SHINICHI)  
下関市立大学・経済学部・教授  
研究者番号：00259681